

雲棲株宏『竹窓隨筆（初筆）』訳注（五）〔宋明思想研討会編〕

荒 木 龍 太 郎（代表）

《凡 例》

- 底本には民国二十三（一九三四）年に商務印書館から発行された「上海涵芬樓拋雲棲法彙本景印」の『竹窓隨筆』を用い、嘉興蔵の雲棲法彙本（中華大蔵經・第二輯・第一二九冊所収）および承応二年（一六五三）の和刻本（和刻影印近世漢籍叢刊・思想四編・第七冊）を参考した。
- 荒木見悟『竹窓隨筆』（明德出版社・中国古典新書・一九六九）に収載された部分については、それをもとにして改訂を加えた。
- 原文は当用漢字を用い、書き下し文は現代仮名遣いとした。
- 現代語訳は直訳を心掛けたが、必要と思われる場合は「」で適宜ことばを補った。
- 注に引用した書籍については、その初出の箇所を明記した。また大正大蔵經・大日本統蔵經（正統蔵）についてはそれぞれ「T」「Z」の略号を用いた。
- 各段の終わりに原稿の責任者の名前を付した。
- 研究会の参加者は以下の通り。

安部 力・荒木見悟・荒木龍太郎・石田和夫・牛尾弘孝・塚野剛史・鶴成久章・榎崎洋一郎・野口善敬・早坂俊廣・藤井良雄・藤原静郎・堀 豊
(五十音順)

《本文》

【九三】 武夷図

予病中有贈以武夷九曲図者。閱之忻然。因思古人沈疴不起、一友教翫輞川図、不浹旬而愈。況西方極樂世界、絵画流布、朝夕參礼、而未聞奇驗速効、如輞川者何耶。良繇輞川蹟在寰中、易為描写、極樂境超世外、難以形容、則不若絵輞川者之備極工巧、聳人心目故也。彼鷄頭摩之所伝十六觀經之所説、亦略示其概而已。夫極樂世界、忉利兜率化樂諸天、所不能及其少分。使人得而詳觀、何止四百四病之俱忘。將八万四千煩惱諸病、皆消滅無餘矣。昔人謂、神棲安養、又謂、先送心帰極樂天。豈徒然哉。

*

武夷の図

予の病中に、贈るに武夷九曲の図を以てする者有り。之を閲して忻然たり。因りて思う、古人沈疴して起たざるに、一友、輞川の図を翫せしむれば、浹旬ならずして愈ゆ。況や西方極樂世界は、絵画流布し、朝夕參礼するも、未だ奇驗速効、輞川の如き者を聞かざるは何ぞや。良に輞川の蹟は寰中に在りて、描写を為し易く、極樂の境は世外に超え、以て形容し難ければ、則ち輞川を絵く者の備極めて工巧にして人の心目を聳つるに若かざるに繇るが故なり。彼の鷄頭摩の伝うる所の十六觀經の説く所も亦た其の概を略示するのみ。夫れ極樂世界は、忉利・兜率・化樂の諸天も、其の少分に

及ぶ能わざる所なり。人をして得て詳かに觀しむれば、何ぞ止だに四百四病の俱に忘るるのみならん。將に八万四千の煩惱諸病、皆な消滅して餘り無からんとす。昔人、「神、安養に棲む」と謂い、又た「先ず心を送って極樂天に歸す」と謂うは、豈に徒然ならんや。

*

武夷山の図

私が病氣をしている時に、武夷山の九曲の図を贈ってくれたものがあり、それを見て楽しかった。そこで思ったのだが、昔の人で長患いして起きあがれなかったのに、ある友人が輞川の図を見て楽しむようにさせたら、十日もしないうちに治った（という話がある）。まして西方の極樂世界は、その絵画が流布し、「たくさんの人たちが」朝夕拜んでいるのに、輞川（の図）の様な速効をもたらした靈驗譚を耳にしないのはどうしてであろうか。「それは」まぎれもなく輞川の場合がこの世界の中であって「実物を見ることが出来るから」描写をしやすく、極樂の世界はこの世の外に超出していき難いものであり、「極樂を描いた絵は」輞川を描いた人がとてもたくみで人々の目を驚かせるのに及ばないからである。あの鷄頭摩（寺の五通菩薩）が伝えたもの（絵に描かれた浄土）や『觀無量壽經』に説かれた「浄土の」有り様も、またその概略を示したにすぎない。そもそも極樂の世界（の素晴らしさ）は、忉利天・兜率天・化樂天といった諸々の天上世界でさえも、少しも及ぶところではないのである。もし人々が「極樂世界の本当の有り様を」詳しく見ることが出来るならば、どうして「この肉体につきまとう」四百四種類の病気の心配が無くなるだけであろうか。「人の苦惱のものである」八万四千の煩惱の病も、すべて余すところなく消え失せてしまうのである。昔の人が、「神は安養に棲んでい」と言い、また「まず心を極樂の天に送り返すのだ」と言っているのは、いいかげんなことではないのである。

*

○武夷―福建省崇安県の南にある山の名。昔、神人武夷君がここにいたとされる。福建一の景勝の地として著名で、お茶の産地としても知られる。○九曲―武夷山は三十六峰・三十七巖があり、その間を溪流が屈曲して流れており、清溪の九曲と呼ばれている。画題としてしばしば用いられている。○古人沈疴不起、一友教翫輞川図、不浹旬而愈―輞川は陝西省藍田県の南にある川の名で勝景として知られる。ここに別荘を構えていた唐の王維が輞川を描いた名画が輞川図である。唐の朱景玄『唐朝名画録』に、この輞川図に関わる逸話として次のような話を載せる。「王維画輞川図、山谷鬱盤、雲水飛動、意出塵外、怪生筆端。嘗自題詩云、『当代謬詞客、前身応画師』。其自負也如此。秦太虚云、『余臥病、高符仲携輞川図示予曰、『閱此可以癒病』。余甚喜、恍然若与摩詰(―王維)入輞川。数日而疾癒』。株宏はこの話を踏まえたものと思われるから、古人は宋の秦觀(字は太虚)を指すものであろう。○鷄頭摩之所伝十六觀經之所説―鷄頭摩は天竺にあつた鷄頭摩寺のこと。『法苑珠林』卷一五(T53・401a)によれば、鷄頭摩寺の五通菩薩が阿弥陀仏の許しを得て、蓮華に坐した一仏五十菩薩の図像を描き、その画像が漢の時代、迦葉摩騰の甥に当たる僧侶によって中国に将来されたという。十六觀經は十六の觀法が説かれた『觀無量寿經』のこと。○忉利兜率化樂諸天―六道の中の天上世界を指す。仏教における天は、下層から順に、欲界に属する六欲天(①四天王天、②三十三天(忉利天)、③夜摩天、④觀史多天(兜率天)、⑤樂變化天(化樂天)、⑥他化自在天)、色界に属する四禪天(①初禪〔梵天〕、②第二禪、③第三禪、④第四禪)、無色界に属する四天(①空無辺処、②識無辺処、③無所有処、④非想非非想処)からなる。ここで挙げられてるのは、この中の欲界に属する六欲天の中の三つであり、下層の天に属する。○四百四病―肉体の構成要素である四大にそれぞれ百一の病があるとされ、その合計が四百四である(大智度論・卷五八(T25・469c))。○昔人謂、神棲安養―『樂邦文類』卷五(T四七・二一四c)に、永明延寿の「神棲安養賦」を載せる。安養は西方浄土のこと。○又謂、先送心帰極樂天―典拠未詳。

(野口善敬)

【九四】談宗

予未出家時、乍閱宗門語、便以情識模擬。与一座主書、左縦右横。座主憚焉。出家數年後、重會座主於一宿菴。勞問間、見予專志浄土、語不及宗、矍然曰、子向日見地超卓、今反卑近何也。予笑曰、諺有之。初生牛犢不畏虎。識法者懼。君知之乎。座主不答。

*

宗を談ず

予、未だ出家せざる時、乍たちまち宗門の語を閲し、便ち情識を以て模擬し、一座主に書を与え、左縦右横す。座主これを憚る。出家して數年の後、重ねて座主に一宿菴に會す。勞問の間、予の、志を浄土に専らにし、語、宗に及ばざるを見て、矍然として曰く、「子の向日の見地は超卓なるに、今、反つて卑近なるは何ぞや」と。予、笑いて曰く、「諺に之有り。『初生の牛犢は虎を畏れず』と。法を識る者は懼る。君、之を知るや」と。座主答えず。

*

禅宗を語ること

私が、まだ出家していなかった時、はじめて禅宗の語録を読み、すぐに迷妄にもとづく分別の心でその〔表現などの〕真似をし、ある座主に手紙を出して、「その中で」書きたい放題に書きまくった。座主はその手紙に恐れ入ったようであった。出家してから數年後に、「私は」ある宿菴でその座主と再會した。ねぎらいの言葉を交わしているうちに、「座主は」私が浄土のことに専念し、禅宗のことには言及もしないのを見て、驚いてこう言った、「あなたの以前の見解は、ずばぬけて優れたものでしたが、今はかえって卑近なのは、一体なぜですか」と。私は笑って答えた、「こういう諺があります。『生まれたばかりの子牛は、『何もわかっていないので』虎を怖がらない』と。〔真に〕仏法がわかった者は、〔仏法

を」懼れる「(ので大それたことは口にしない)のです。あなたはこのことをご存知ですか」と。座主は答えなかった。

*

○情識||凡夫の迷情にもとづく見識。これはどんなに緻密でも、迷妄である点には変りがない。○模擬||まねごとにしらえる。○座主||教学の師。○左縦右横||左右縦横、思ったことを自由自在に書きなぐること。○勞問||ねぎらいなぐさめる。○矍然||おどろくさま。○初生牛犢不畏虎||ことわざ。生まれたばかりの子牛は、虎を怖がらない。人生経験の浅い若者は怖いもの知らずであることを言う。○識法者懼||掟を心得ているものは常に小心である、まともな人間は自らを慎むのだ。『碧巖録』第三七則・本則著語に、「所謂公案なる者は、惟だ法を識る者は懼る」とある。

(檀崎洋一郎)

【九五】念仏

世人稍利根、便輕視念仏、謂是愚夫愚婦勾当。彼徒見愚夫愚婦口誦仏名心遊千里、而不知此等是名誦仏非念仏也。念従心。心思憶而不忘、故名曰念。試以儒諭。儒者念念思憶孔子、其去孔子、不亦庶幾乎。今念念思憶五欲、不以為非、而反以念仏為非。噫、似此一生空過、何如作愚夫愚婦耶。而惜乎、智可能也、愚不可能也。

*

念仏

世人の稍や利根なるは、便ち念仏を輕視し、是れ愚夫愚婦の勾当なりと謂う。彼は徒だ愚夫愚婦の口には仏名を誦するも心は千里に遊ぶを見るのみにして、此等は是れ仏を読むとは名づくるも仏を念ずるには非ざるを知らざるなり。念は心に従う。心に思憶して忘れず、故に名づけて念と曰う。試みに儒を以て諭えん。儒者、念念孔子を思憶すれば、其の

孔子を去ること、亦た庶幾からずや。今、念念五欲を思憶するは、以て非と為さずして、而も反つて念仏を以て非と為す。噫、此くの似くごと一生空しく過ごすは、愚夫愚婦と作るなに何如ぞ。而れども惜しいかな、智は能くすべきも、愚は能くすべからざるなり。

*

念仏

少しばかり優れた機根を持つ世間の人は、念仏を軽視して、「〔あれは〕愚かな人間のやることだ」などと言う。彼らはただ愚かな人間が口では仏の名を唱えながら、心は遠く別のところにうろうろしているのを見るだけであつて、こうした態度は仏〔の名〕を唱えるとは言つても、仏を念じるのではないということを知らないのである。「念」〔という字〕は「心」に従っている。心に思い続けて忘れないから、「念」というのである。ためしに儒教にたとえを取つてみよう。儒者が念々孔子を思い続けければ、彼は孔子とほとんど変わらないのではないだろうか。いま念念五欲を思い続けるのは間違いだとは思わないで、かえつて念仏を間違いだとしている。ああ、このように一生を虚しく送るくらいなら、愚かな人間になつたほうがまだましだ。しかし残念なことには、「人は」利口ぶることはできても、馬鹿にはなれないものである。

*

○念仏―「念」とは『説文解字』に「常思なり。心に从う」といい、また梵語でも「心に記憶して忘れないこと」を意味する。しかし「念仏」には、心に仏の姿や徳をひたすら思い続ける観想としての念仏と、口に仏の名を唱える称名の念仏との大きく二つがあり、特に浄土教の発展にともない、「念仏」と言えば主として後者を指すようになった。ここで言う「念仏」は、雑念を排してひたすら称名に没入することである。○利根―優れた機根・資質。また、これを持つ人。

○勾当―物事を担当し処理する。また、その内容となる仕事。○五欲―五境に対して五官の起こす、色欲・声欲・香欲・味欲・触欲の五つの情欲。あるいは、財欲・色欲・食欲・名欲・睡眠欲をいう。総じて、人間の世俗的な欲望を意味する。○智可能也、愚不可能也―『論語』「公冶長」の「其知可及也、其愚不可及也」をふまえた表現。(塚野剛史)

【九六】僧性空

吳泗洲寺僧性空、棄応院、閉関堯封山。嘗寄予所發誓願、及稟告十方等語。予嘉嘆希有。俄而魔著遂癡狂以死。予甚悼焉。揆其由、蓋由乍起信心、有信無慧故也。古人心地未通、不遠千里、參師訪道。出一叢林、入一保社、乃至窮遊徧歷、曾不休息。得意之後、方於水辺林下、長養聖胎耳。何得纔離火宅、便入死関。有過不知、有疑莫辨、求升而反墮。又奚怪其然哉。頗有初心学人、結茅深山、孤子独居、自謂高致。雖未必魔癡、而亦頓失利益不少。明者試一思之。

*

僧性空

吳の泗洲寺の僧性空は、応院を棄て、堯封山に閉関す。嘗て予に發する所の誓願、及び十方に稟告する等の語を寄す。予、希有なりと嘉嘆す。俄にして魔著きて遂に癡狂して以て死す。予甚だ焉これを悼む。其の由を揆るに、蓋し乍ち信心を起こせども、信有つて慧無きに由るが故なり。古人は、心地未だ通ぜざれば、千里を遠しとせず、師に參じ道を訪う。一叢林を出でて、一保社に入り、乃至窮遊徧歴して、曾て休息せず。得意の後は、方まさに水辺林下に於て、聖胎を長養するのみ。何ぞ纔かに火宅を離れて、便ち死関に入るを得ん。過有れども知らず、疑有れども辨ずる莫ければ、升ることを求めて反つて墮つ。又た奚ぞ其の然るを怪しまんや。頗る初心の学人有り、茅を深山に結び、孤子独居して、自ら高致と謂えり。未だ必ずしも魔癡ならずと雖も、亦た頓に利益を失すること少なからず。明者、試みに一もつぱら之を思え。

性空という僧侶

*

呉の泗洲寺の僧性空は、応院に見切りをつけて、堯封山に閑を閉じ「坐禪にふけつ」た。以前、私にその発起した誓願と諸方の「すぐれた」人々に申し述べた言葉などを寄せてくれた。私は世に珍しいことだと感嘆した。「ところが」突然、悪魔がとりついて、ついに物狂いして亡くなった。私は心から哀悼した。そのわけを考えてみるに、恐らく不意に信心を起こしたけれども、信心だけで智慧がなかったからである。古人は、心がまだ「悟りに」通じなければ、千里の道を通しとせず師を訪ね道を問うた。ある叢林を出ては、別の寺院に入り、かくてあまねく歴遊して、少しも気を緩めない。道を体得してから、はじめて「人里離れた」水辺や林の中で悟後の修養をするだけである。火宅の世間を離れたとたんに、死関に入ることが出来ようか。過があっても気づかず、疑いがあっても解決しなければ、昇ろうとして逆に落っこちる。だから「性空が」あんなったのも当然のことなのだ。とかく初学者は深山に茅屋を結び、孤独の生活をして、自分では高尚だと思っている。それは必ずしも物狂いではないが、すぐに利益を失いがちである。賢明な人は、よくよく考えてみるがよい。

(荒木見悟)

【九七】行脚

予単丁行脚時、忍飢渴衝寒暑、備歷諸苦。今幸得把茆蓋頭。雖不識修行、而識慚愧。雲水乍到、供事唯勤、己身受用、不敢過分。蓋謂曾為浪子偏憐客、窮漢起家、惜土如金也。今年入緇門、便住見成菴院、事事如意、喻似富家兒、不諳民間疾苦。縱才智兼人、無賴參訪而閉門自大、習成我慢、增長無明。亦所失多矣。

*

行脚

予、単丁にて行脚せし時、飢渴を忍び寒暑を衝き、諸々の苦を備つよさに歴す。いま幸に茹かを把とりて頭を蓋うを得。修行を識らずといえども、慚愧を識れり。雲水乍ち到り、供事のみ唯だ勤め、己が身の受用は、敢て分を過ぎず。蓋し謂へらく、曾て浪子と為らば偏ひとえに客を憐れむ。窮漢にして家を起つれば土を惜しむこと金の如きなり。いま乍ち緇門に入り、便ち見成の菴院に住み、事事如意ならば、喩えば富家の兒の民間の疾苦を諳んぜざるに似たり。縦え才智の人を兼ねるとも、参訪に頼る無く門を閉じ自大たれば、我慢を習成し、無明を増長す。亦た失うところ多し。

*

行脚

私はたった一人で行脚をしていた時、飢渴に耐え寒暑をもともせず、さまざまな苦難をつぶさに経験した。今は幸いにも茅葺きの草庵に住している。「本当の」修行については分かっていないけれども、恥は知っているつもりである。雲水がふいに「私の草庵に」やってくれば、「その雲水に対する」供おせわ事に没頭し、自身の分を越えたものは決して享受しない。つらつら考えるに、自分に放浪の経験があるからこそ「雲水のような」旅人にしきりと同情を寄せ「て、このようなお世話をす」るのである。「これに対し」貧乏人が家を興したならば、「自分の」土地への愛着は金に対するかのように「すさまじいもの」となる。もし仏門に入るなり、すぐに出来合いの仏庵に住み、悠悠自適の生活を送ったとしたら、それは喩えてみれば、金持ちの子供が世間の苦しみに不案内なようなものである。たとえ才覚が人並み以上に優れていても、参あんぎや訪もせずに門を閉ざしてふんぞり返っていれば、傲慢さを根付かせ、煩惱を増長させてしまう。「せっかく仏門に入って修行していても」やはり失うものが多いのである。

*

○单丁Ⅱ「一人っ子」「片方」の意味。ここでは「一人で」という意味に取った。○把茆蓋頭Ⅱ『仏学大辞典』（文物出版社）には「言有一把茅作個草庵。蓋在頭上、以蔽風雨也。」とある。意味は変わらないが、これに従うならば「把の茆ひとたばにて頭を蓋う」と訓ずることになる。○為浪子偏憐客Ⅱ『大慧書』「答富枢密第三書」に「相見時、試問渠、如何做工夫。曾為浪子、偏憐客」とある。荒木見悟訳では、「お会いの折、ためしに彼に問うてごらんさい。どのように工夫をしましょうか」と。「彼は」放浪の経験がありますから、ずいぶん相手に同情するでしょう。」（五九頁）となっている。○縦才智Ⅱ和刻本は「才智をほしいままにし」と訓んでいる。
（早坂俊廣）

【九八】妙宗鈔

曩一僧謂予曰、仏示西方、本為普利諸根、速超生死。是易行道。而知礼法師、純以台教精深觀法積之、使易反成難、失如来曲為凡夫本意。此論亦甚有理。今思之、古人謂、解仏経、寧以淺為深、毋以深為淺、則妙宗所説、利根者自悟深理、鈍根者亦不失依経直觀。求願往生、似無所礙。

*

妙宗鈔

曩むかし一僧、予に謂いて曰く、「仏、西方を示すは、本もとと普く諸根を利し、速やかに生死を超えしめんが為なり。是れ易行道なり。而るに知礼法師は、純もつぱら台教の精深なる觀法を以て之を積し、易をして反つて難とし、如来の曲げて凡夫の為にするの本意を失わしむ」と。此の論亦た甚だ理有り。今之を思うに、古人、「仏経を解するには、寧ろ浅きを以て深きと為すも、深きを以て浅きと為す毋かれ」と謂い、則ち『妙宗』の説く所は、「利根の者は自ら深理を悟り、鈍根の者も亦た経に依りて直觀することを失せず」なり。往生を求願するに、礙うる所無きに似たり。

『妙宗鈔』の説

*

以前、ある僧が私に次のように言ったことがある。「仏が西方浄土を示されたのは、もともと普く衆生を利益し、速やかに生死の念を超越させるためであった。これは『易行道(行い易いやり方)』であった。ところが、知礼法師はもっぱら天台大師の精妙で深遠な観法で「西方浄土を」解釈し、行い易いのを却って難しくしてしまった。如来がわざわざ凡夫のために設けた本来の意図を失うものだ」と。この意見は非常に筋が通っている。「だが」今、このことを考えてみると、古人は、「仏典を解釈するには、むしろ浅いところに深い意味を認めても、深いものを浅いとしてはいけない」と言っているが、「知礼法師の」『妙宗鈔』に説くところは「素質のすぐれた人は自ら深い仏理を悟るし、素質の劣った人も經文に依ってそただちにそれ(仏)を観ることができるといふことである。「だから『妙宗鈔』も」衆生が浄土往生することを求願うのに、何ら障碍はないようだ。

*

○妙宗鈔『観無量寿経疏妙宗鈔』(T38)。宋の四明山、法智尊者知礼の書。天台大師智顛の観経法疏を釈したもの。
○易行道『だれでも容易に行える道。浄土門をいう。難行道の対。○知礼法師』北宋の天台宗山家派、法智知礼(九六〇〜一〇二八)。上記『観無量寿経疏妙宗鈔』の著があり、天台学の一心三観論・六部論等を基本にして『観無量寿経』を解釈している。従って、株宏のように念仏往生を重視していない。○観法『諸法の真の姿を観察すること。○古人』未詳。この前後の内容は、『竹窓二筆』の「浄土難信之法」と共通している。○妙宗所説…不詳。(牛尾弘孝)

或問、仙出神。禪者能之乎。曰、能之而不為也。楞嚴云、其心離身、反觀其面、是也。而繼之曰、非為聖証。若作聖解、即受群邪。是能之而不為也。又問、神之出也、有陰有陽。楞嚴所云陰神也。仙出陽神。禪者能之乎。曰、亦能之而不為也。或者愕。曰、母愕也。爾不見、初祖已沒、隻履西歸乎。爾不見、宝誌公獄中一身、市中一身乎。爾不見、瀉山晏坐静室、乃於庄上喫油糍乎。然亦不名聖証、宗門呵之。昔一僧入定出神、自言、我之出神、不論遠近、皆能往来、亦能取物。正陽神也。先德責云、円頂方袍、參禪學道、奈何作此鬼神活計。是故吾宗、大禁不許出神。

*

出神一

或ひと問う、「仙、神を出す。禪者之を能くするや」と。曰く、「之を能くすれども為さざるなり。『楞嚴』に云う、『其の心、身を離れて、反つて其の面を觀る』と、是れなり。而して之に繼ぎて曰く、「聖証と為すに非ず。若し聖解を作さば、即ち群邪を受けん」と。是れ之を能くすれども為さざるなり」と。又た問う、「神の出ざるや、陰有り陽有り。『楞嚴』に云る所は陰神なり。仙は陽神を出す。禪者之を能くするや」と。曰く、「亦た之を能くすれども為さざるなり」と。或る者愕く。曰く、「愕く母かれ。爾、初祖已に没すれども、隻履にて西に歸るを見ざるや。爾、宝誌公の獄中の一
身、市中の一身を見ざるや。爾、瀉山、静室に晏坐して、乃ち庄上に於て油糍を喫するを見ざるや。然れども亦た聖証と名づけず、宗門にては之を呵す。昔し一僧定に入りて神を出し、自ら言う、「我の神を出すや、遠近を論ぜず、皆な能く往来し、亦た能く物を取る」と。正に陽神なり。先德責めて云う、「円頂の方袍の參禪學道は、奈何ぞ作此の鬼神の活計を作さん」と。是の故に吾が宗にては、大いに禁じて神を出すを許さず。

*

神の肉体離脱その一

ある人が質問した、「仙人は神を〔肉体から〕離脱させますが、禅僧にそれができますか」。「答えて」言う、「できるけれども取り合わないのだ。『楞嚴經』に『その心が身体を離れて、あべこべにその顔を見る』とあるのが、それである。〔また『楞嚴經』には〕続けて『それは〕聖なる証ではない。もし聖という解を持つなら、たちまち群邪を招き寄せる』とある。これが、できるけれども取り合わない〔という理由な〕のだ」。また質問した、「神が〔肉体から〕離脱する際には、陰神(魄)の場合と陽神(魂)の場合があります。『楞嚴經』で言っているのは陰神(魄)のことであり、仙人は陽神(魂)を離脱させるのです。禅者にもそれができますか」。「答えて」言った、「これもできるけれども取り合わないのだ」。その人は驚いた。「そこで言った、」「驚いてはいけない。あなたは初祖〔達磨〕が既に亡くなっていたのに片方の履を持ってインドに帰ったという話を知らないのか。あなたは宝誌が〔予言をよくしたために、衆を惑わす者として、齊の武帝から〕獄中にその身を収監されたが、〔翌朝には〕街中に姿があつたという話を知らないのか。あなたは偽山靈祐が静かな〔自分の〕部屋に坐つたままで、〔寺の〕畑で揚げ菓子を食べた話を知らないのか。〔いずれも不思議な話ではあるが、〕聖なる証とは呼ばず、禅門では〔聖なる証と呼ぶことを〕非難している。昔し、ある僧侶が禅定に入って神を離脱させ、自ら『私の神の離脱は〔離れる距離の〕遠近を問わず、どこでも往復できるし、また物を取つてこれる』と言つた。〔これは〕まさしく陽神(魂)であるが、先徳は『頭を丸め袈裟を付けて参禅学道していながら、どうしてこんな鬼神の活計をするのか』と叱責した。だからわが禅宗では神の離脱を嚴禁して許さないのだ」。

*

○楞嚴云…『楞嚴經』卷九に「若魘咎歇、其心離身、返觀其面、去住自由。無復留礙、名受陰尽」(T19. 148b)とある。○而繼之曰…『楞嚴經』卷九に繰り返し出てくる言葉。○神之出也、有陰有陽『參同契』卷上に「陰陽有度、魂魄所居。陽神日魂、陰神月魄、互為室宅」とある。○初祖已没…『隻履の達磨』として知られる。達磨の死後三年、

魏の宋雲が西域への使いからの帰途、手に隻履を携えて西天に帰っている達磨に葱嶺で出会ったという話。『景德伝燈録』卷三（T51. 220b）参照。○宝誌公獄中……『景德伝燈録』卷二七の「宝誌禪師」条に、「齊建元中、武帝謂『師惑衆、収付建康獄。既旦、人見其入市。及檢獄如故。帝延於宮中之後堂。師在華林園、忽一日重著三布帽。亦不知於何所得之』（T51. 429c）とある。○瀉山晏坐静室……瀉山の語録には同様の話は見えない。『五燈会元』卷七「鵝湖智孚禪師」条にある次の話を踏まえたものであろう。「師一日不赴堂。侍者来請赴堂。師曰、『我今日在莊喫油糍飽』。者曰、『和尚不曾出入』。師曰、『你但去問取莊主』。者方出門、忽見莊主婦謝和尚到莊喫油糍。』（Z138. 132d）○昔一僧入定……典拠未詳。

（藤原静郎）

【100】出神二

又問、神有何過。曰、神即識也。而分麤細、有出有入者、麤也。直饒出入俱泯、尚住細識。細之又細、悉皆渾化、始得本体耳。而著於出入、以為奇妙、前所謂無量劫来生死本、痴人認作本来人也。

*

出神二

又た問う、「神に何の過か有る」と。曰く、「神は即ち識なり。而して麤細を分かつたば、出有り入有る者は、麤なり。直饒たとい出入俱に泯ずるも、尚お細識を住とどむ。之を細にし又た細にして、悉皆ことごとく渾化して、始めて本体を得るのみ。而るに出入を著わすを、以て奇妙と為すは、前の所謂『無量劫来の生死の本、痴人は認めて本来人と作す』なり」と。

*

神れいこんの肉体離脱その二

また問う、「神のどこが悪いというのでしょうか」。答え、「神とは識別作用(のかたまり)にほかならない。そして、粗雑と微細とを区別すれば、出入があるものは粗である。たとえ出入をもとに消してしまっても、なお微細な識別作用が残っており、それをとことんまで微細にして、完全に渾然無分別になって、はじめて本体が得られるのだ。それなのに、「肉体からの」出入を示現するのをすぐれて妙なることとみなすのは、古人の言う「無始の時から生死輪廻の根源を、愚か者は本来の主人公だと誤認する」ということである」。

*

○識||十二因縁の第三番目である識のこと。識別作用。○無量劫来生死本、痴人認作本来人||無始の時から生死輪廻の根源を、愚か者は本来の主人公だと誤認すること。『伝灯録』卷一〇・湖南長沙景岑禪師条に、「有偈曰、学道之人不識真、只為従来認識神。無始劫来生死本、痴人喚作本来身」とある。また、『碧巖録』六〇則「評唱」にも、「長沙道、学道之人不識真、只為従前認識神。無量劫来生死本、痴人喚作本来人」とある。(鶴成久章)

【二〇一】聞訃

聞人訃音、必大驚訝。此雖世間常情、然生必有死、亦世間常事、自古及今、無一人得免者。何足驚訝。特其虚生浪死而不聞道、是重可驚訝、而恬不驚訝。悲夫。

*

訃を聞く

人の訃音を聞けば、必ず大いに驚訝す。此れ世間の常情なりと雖も、然れども生るれば必ず死有るは、亦た世間の常事にして、古え自り今に及ぶまで、一人も免るることを得る者無し。何ぞ驚訝するに足らん。特に其の虚生浪死して道を

聞かざるは、是れ重^{はなは}だ驚訝す可きも、恬として驚訝せず。悲しいかな。

*

訃音を聞く

人の訃音を聞くと、必ず大いに驚く。これは世間の普通の人情であるが、生まれたら必ず死ぬのは、世の常であつて、昔から今に至るまで免れた者はいない。どうして驚くに値しようか。ただ、むだに生死を繰り返しながら、仏の道を開かないことこそ、はなはだ驚くべきことなのに、平然として驚かない。まったく悲しいことである。（荒木龍太郎）

【一〇二】 齋素

富貴之人不能齋素、其故有二。一者耽芻豢之悦口、二者慮藜藿之損身。不知肉食蔬食、体之肥瘦或因之、而寿夭不与也。且鹿之寿最永於諸獸、而所食者草耳。虎食肉、而寿之長短、於鹿何如也。鹿不肉而寿。人何独不然。雖然、有厄於病苦、心雖欲齋而力不副者、有制於所尊、心雖欲齋而勢弗克者、則姑行月齋日齋及三淨肉、但堅持不殺可也。久之宿習当自断。

*

齋素

富貴の人の齋素する能わざる、其の故二有り。一は芻豢の口を悦ばすに耽り、二は藜藿の身を損うを慮る。肉食蔬食は、体の肥瘦、或いは之に因るも、寿夭は与らざるを知らざるなり。且つ鹿の寿は最も諸獸より永けれども、食する所の者は草のみ。虎は肉を食するも、寿の長短、鹿に於て何如ぞや。鹿は肉せずして^{いのちなが}寿し。人何ぞ独り然らざらんや。然りと雖も、病苦に厄される有りて、心に齋せんと欲すと雖も而も力副わざる者、尊ぶ所に制せらるる有りて、心に齋せんと欲すと雖も而も勢い克たざる者は、則ち姑く月齋・日齋及び三淨肉を行い、但だ不殺を堅持すれば可なり。之を久しく

すれば宿習当に自ら断ずべし。

*

潔齋して肉食をひかえる

富貴の人が「精進潔齋して」肉食をひかえられないのには、二つ理由がある。一つには羊や豕ぶたの肉のうまさに我を忘れるからであり、二つには粗食が身体をそこなうのではないかと恐れるからである。肉食であるか菜食であるかは身体の太り具合には関係するかもしれないが、寿命の長短には関係しないということに気づいていないのである。たとえば鹿の寿命は多くの動物に比べて最も長いが、食べるのは草だけである。虎は肉を食べるが、寿命の長さは鹿と比べてどうであろうか。鹿は肉食しないのに長生きする。人間だけがそうでないわけがあるうか。しかしながら、病苦にわざわざいされて、心では潔齋したいと思っても氣力が足りなかったり、父母にとめられて、心では潔齋したいと思っても、なりゆき上どうにもならない者は、とりあえず一日の潔齋や一ヶ月の潔齋、さらには三種の浄肉の教えを實踐し、不殺の教えさえしつかりと守ればそれでよい。しばらくたつと、しみついた習慣は自然と消えるだろう。

*

○芻豢ちうくわんちうくわん芻は牛羊など草を食む動物。豢は犬豕など穀物を食む動物。○藜藿れいこく藜はあかざやの葉、藿はまめの葉。粗食のたとえ。○三浄肉さんじやうじゆ浄肉は比丘が食べても罪にならない肉。我が眼にその殺すを見ない肉、我がために殺したことを聞かない肉、我がために殺したものでないことの疑いない肉、の三種の肉をいう。

(石田和夫)

【一〇三】 輪廻根本

円覚謂、輪廻以愛欲為根本。而此愛欲、百計制之、莫可除滅。蓋賁育無所施其勇、良平無所用其智、而離婁公輪無所着

其明巧者也。雖不淨觀正彼对治、而博地凡夫障重染深、祇見其淨、不見其不淨。觀法精微、鮮克成就。然則竟如之何。經云、欲生於汝意、意以思想生。今觀此想、復從何生。研之究之、又研究之、研之不休、究之不已、老鼠入牛角、当必有倒断処。

*

輪廻の根本

円覚に謂う、「輪廻は愛欲を以て根本と為す」と。而して此の愛欲は、百計もて之を制するも、除滅す可きこと莫し。蓋し責・育も其の勇を施す所無く、良・平も其の智を用うる所無くして、離婁・公輸も其の明巧を着もちうる所無き者なり。不淨觀は正まさに彼の対治なりと雖も、博地の凡夫は障重く染深く、祇だ其の淨を見るのみにして、其の不淨を見ず。觀法精微なるも、克よく成就するもの鮮すくなし。然らば則ち竟に之を如何せん。經に云う、「欲は汝の意に生じ、意は思想を以て生ず」と。今、此の想を觀ずるに、復はた何く從り生ずるや。之を研みがき之を究め、又た之を研究し、之を研やいて休やまず、之を究めて已やまざれば、老鼠の牛角に入るがごとく、当に必ず倒断の処有るべし。

*

愛欲は輪廻を引き起こす根本

『円覚經』に、「輪廻というものは愛欲が根本である」とあるが、この愛欲（欲とそれによって引き起こされる愛〔執着〕）というものは、あらゆる手だてで押さえつけても、除き尽くすことはできない。思うに、孟賁や夏育〔といった勇者〕でもその勇気を發揮しようがなく、張良や陳平〔といった智謀家〕でもその智略を用いようがなく、〔とても視力のすぐれた〕離婁や〔工芸にたくみな〕公輸でもその視力や技術をはたらかせようがないものである。〔自己の不淨を觀察する〕不淨觀は、まさに愛欲を克服する〔ための〕ものなのだが、下劣な凡夫は、罪障が重く〔煩惱の〕染習が深く、自分の

清らかな面だけを見て、不浄な面を見ない。だから、いくら不浄観をことこまかく実行しても、それを成し遂げるものはほとんどいないのである。それでは一体どうしたらよいのか。經典に、「欲はお前の意から生じ、意は想念から生じる」とある。今この想念を観察してみるのに、それは一体どこから生じるのか。それをとことんまで、究めに究め、調べに調べると、鼠が牛の角の中に入り込んで「にっちもさっちもいかなかったようになって」、きつと想念の断ち切れる折があるだろう。

*

○円覚謂：『『円覚經(大方広円覚修多羅了義經)』に全くそのままの文章は見えないが、「当に知るべし輪廻は愛を根本と為す。諸々の欲有るに由りて、愛性を助発す。是の故に能く生死をして相續せしむ。欲は愛に因りて生じ、命は欲に因りて有り(当知輪廻愛為根本。由有諸欲、助発愛性。是故能令生死相續。欲因愛生、命因欲有)』(T17・916b、柳田聖山訳注本・一〇六頁)とあるのを踏まえたものであろう。○賁育孟賁と夏育。孟賁は戦国時代、夏育は周代の勇士で、何れも非常な力持ちであったと言われる。○良平張良(? BC一八九)と陳平(? BC一七八)。どちらも漢の高祖に仕えた智謀の士として知られる。○離婁人名で古代黄帝の時の明目者(視力が良い人)の名。離朱とも呼ばれ、百歩離れた所にある毛の先が見えたと言われる。○公輸春秋時代のすぐれた工匠の名。公輸班・公輸般ともいう。○不浄観人間の肉体の不浄な相状を、色々な観点から内省することによって、肉体への執着を消滅させることを意図した観法。実際に人の遺骸が朽ち果てていく様を見つめる白骨観がよく知られている。○博地凡夫博地は薄地とも書く。凡夫を内凡・外凡・薄地の三つに分ける中の一つ。下劣で何もわきまえない凡夫の意。○經云：『典拠未詳。○老鼠入牛角老は接頭語。鼠が牛の角の中にもぐり込むと、その奥は次第に狭く曲がっていて、抜き差しならない窮地に陥ること。進退に窮することに喩える。『大慧書』「答呂郎中」など禅門の語録に、公案参究の有り様としてしばしば引かれる。

【一〇四】病者衆生之良薬

世人以病為苦。而先徳云、病者衆生之良薬。夫薬与病反、奈何以病為薬。蓋有形之身、不能無病。此理勢所必然。而無病之時、嬉怡放逸、誰覚之者。唯病苦逼身、始知四大非実、人命無常。則悔悟之一機、而修進之一助也。予出家至今、大病垂死者三、而每病発悔悟増修進。繇是信良薬之語。其真至言哉。

*

病は衆生の良薬なり

世人は病を以て苦と為す。而るに先徳云う、「病は衆生の良薬なり」と。夫れ薬と病と反するに、奈何んぞ病を以て薬と為すや。蓋し有形の身は、病無きこと能わず。此れ理勢の必ず然る所なり。而るに無病の時は、嬉怡放逸して、誰か之を覚る者ぞ。唯だ病苦、身に逼りて、始めて四大は実に非ずして、人命は無常なりと知るのみ。則ち悔悟の一機にして、修進の一助なり。予、出家してより今に至るまで、大病して死に垂んとすること三たびにして、病ある毎に悔悟を發して修進を増す。是に繇りて良薬の語を信ず。其れ真に至言なるかな。

*

病氣は衆生の良薬である

世の人々は、病氣は苦しみだと〔ばかり〕思っている。しかし、昔の徳高い人は、「病氣は衆生の良薬である」と言っている。いったい、薬と病氣とは正反對のものであるのに、どうして病氣を薬だなどと言うのだろうか。思うに、〔物質的〕形態を有する〔人間の〕身体は、病氣なしではいられない。これは理の当然である。しかし、病氣でない時は、〔人間は〕

喜び楽しみ、勝手気ままに振る舞うばかりで、誰もそのことを覚らない。病気の苦しみが身にせまって、始めて「人間の身体は」地・水・火・風の四元素が、「因縁によつて仮に結合しているだけであつて」真実のものではなく、人間の生命ははかないものだとなつて分るのである。「これは」悔い改め悟るための一つの機会であり、修行が進むための一つの助けである。私は、出家してから今までに、大病にかかつて死にかけたことが三回あるが、病気になるたびにあやまちを悔い悟る心を起こし、修行をさらに一層進めることができた。このことによつて、「病氣は衆生の」良薬「である」という言葉を信じるようになったのである。「これは」まことにもつともな言葉であることだ。

*

○先徳∥先輩。古徳。古聖先徳とも。古の諸仏諸祖。古の徳の高い人。○病者衆生良薬∥『天目中峰広録』卷一八之上(和刻本・九四a)に見える。○四大∥物質を作り上げている地・水・火・風の四元素のこと。人間の身体もこの四大から成り、病氣はそれらの調和が崩れたときに起こるとされる。○無常∥ありとあらゆるものが移り変わつて、少しもとどまらないこと。この身がはかないこと。永久に存続するのではないこと。○悔悟∥あやまちを悔い悟ること。○修進∥未詳。修行が進むの意に訳しておく。

(檀崎洋一郎)

(一・三〇受理)